

研究主題

主体的に学習に取り組む生徒の育成
～対話を通し、より深い学びへつなげる授業づくり～

I 研究の内容

1 言語活動の充実

- (1) 主体的・対話的で深い学びを意識した継続的な授業実践（一人一実践授業）
- (2) 日常的な取組（生活ノート指導，学活，各教科指導 等）
- (3) 効果的に新聞を活用した実践（NIE）

2 深い学びへとつながる工夫

- (1) 新学習指導要領完全実施に向けて，評価について
- (2) 特別の教科道徳の授業実践・理論研究
- (3) ICT機器を使った授業実践

3 望ましい学習集団づくり

- (1) 保護者や地域・小学校との連携（家庭学習他）
 - ア「自主学習ノート」の有効活用
 - イ 家庭学習について，保護者にも協力を呼びかける。
 - ウ 学習規律や板書方法などを確認して徹底する。

(2) Q-Uの分析と結果を活用した取組

4 小中連携の推進，来年度のコミュニティスクール化に向けて

- (1) コミュニティスクールに関する学習会と組織づくり

II 成果と課題

1 拡大校内研の実施について

(1) 実施日時・会場・参加者数

- ・日 時 2020年7月8日（水） 午後3時30分～4時45分
- ・会 場 笛川中学校体育館
- ・参加者数 本校12名，笛川小学校13名，山梨小学校1名，
岩手小学校1名，日下部小学校1名，山梨南中学校1名
計29名

(2) 実施内容

ア 研究会の主題

コミュニティスクールを活用した学校づくり

-山梨県内の事例を中心に-

イ 実施状況

笛川中学校や，山梨市内の小学校は令和3年度よりコミュニティスクールの制度を導入する計画が進められている。そのための準備として本プロジェクトを活用し，山梨大学の日永龍彦教授を講師に迎え，コミュニティスクールとはどのような仕組みであるのかを学ぶ学習会を行った。日永教授は山梨県内のコミュニティスクールの導入に初期より携わっている。今まで導入してきた県内の他校の具体的な事例をもとに，小学校・中学校の取り組みの具体をお話いただいた。今後は子どもたちに身につけさせたい力を明らかにし，地域や学校どちらにもメリットのある活動を考えていきたい。

2 国語科研究授業・一人一実践について

昨年度に引き続き、国・英・社の文系教科，数・理の理系教科，保体・技家・音の実技教科ブロックの3ブロックで教科指導部会を構成し，授業提案の計画を立て，一人一実践授業を実施した。ブロックごと，新学習指導要領を基に教科の特質に応じた見方・考え方を確認し，「深い学びのとりえ方」と「授業への取り入れ方」を決定した。〈右表参照〉また，本校は各教科担当が一人体制であるので，授業参観シートを用いて他教科の先生方でも参観がし易いように視点を示した。

課題としては，自習体制をとらずに普段の授業内の実践としたことで，お互いに参観し合うことが難しかった点が挙げられる。管理職の先生方には，全職員の一実践を参観していただけたが，今後教師相互の学び合いの場としていくのならば，授業参観の在り方を変えていかなければならないと感じている。

ブロック	国・社・英	理・数	実技教科
7～8月授業者	小野先生	田草川先生	
9～10月授業者	古屋友	筒井先生	10月 布施先生 (長距離走)
11～12月授業者	勝之先生	永関先生	11月 萩原先生
深い学びのとりえ方	自らの考えと他者の考えを交流，関連づけし，自分の意見をつくり上げること。	理科：自然の事物，現象を科学的な視点でとらえ，比較したり関係づけたりするなどの科学的に探究する方法を用いて考えること。 数学：事象を数量や図形及びそれらの関係などに着目してとらえ，筋道を立てて考えをまとめることができる。	体育：自分の技能・体力の向上だけでなく，「支える，知る」など多様なかわり方ができる。 音楽：音や音楽を形づくっている要素や背景にも目を向け，伝統や文化などと関連付ける。
授業への取り入れ方(場面・形態)	ペア・グループ・クラス等での話し合いや，テキストの読み取りを取り入れる。教師側の学習課題の設定や資料提示，発問の仕方を工夫する。	理科：実験，観察の結果をもとに，これまでの学習を関連付けて考えさせる。 数学：利用する内容を明確にして，色々な方法で問題を解いてみる。	体育：互いにアドバイスをしたり，記録を取り合ったりするなどの活動から，「できるとわかる」の視点をもって考えさせる。 音楽：歴史的背景や作者の心情にも触れて考えさせる。
備考			

3 新学習指導要領における評価について

数か月後に迫っている4月より，新学習指導要領の完全実施となる。今までとは異なる3観点での評価を実際にしていく。そこで，下図の表に基づき，「何を・どう評価するか」

を・どう評価するか」，学習指導要領を読み解きながら，それぞれの教科担当ごとに，表をまとめる作業を行った。改めて，各教科の目標に照らして，どんな教材・教具を用いて授業を仕組んでいくことが効果的か，また，生徒に時代に合った力をつけるための授業デザインを考えられる機会となった。

観点別学習評価の各観点	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
何を評価するか	各教科等における学習の進度を通じた知識及び技能の習得状況について評価を行うとともに，それを既存の知識及び技能と関連付けたり活用したりする中で，他の学習や生活の場面でも活用できる程度に概念等を理解したり，技能を習得したりしているかを評価する。	各教科等の知識及び技能を活用して課題を解決する等のために必要な思考力，判断力，表現力等を身に付けているかどうかを評価する。	知識及び技能を獲得したり，思考力，判断力，表現力等を身に付けたりするために，自らの学習状況を把握し，学習の進め方について試行錯誤するなど自らの学習を調整しながら，学びとしていくかどうかという意思的な側面を評価する。
どう評価するか	「知識・技能」の評価の考え方は，従前の評価の観点である「知識・理解」，「技能」においても重視してきたところ。具体的な評価方法としては，例えばペーパーテストにおいて，事象的な知識の習得を問う問題と，知識の概念的な理解を問う問題とのバランスに配慮するなどの工夫改善を図る等が考えられる。また，生徒が文章による説明をしたり，各教科等の内容の特質に応じて，観察・実験を知識や技能を用いる場面を設けるなど，多様な方法を適切に取り入れること等も考えられる。	「思考・判断・表現」の評価の考え方は，従前の評価の観点である「思考・判断・表現」においても重視してきたところ。具体的な評価方法としては，例えばペーパーテストのみならず，論述やレポートの作成，発表，グループや学級における話し合い，作品の制作や表現等の多様な活動を取り入れたり，それらを集めたポートフォリオを活用したりするなど評価方法を工夫することが考えられる。	具体的な評価方法としては，ノートやレポート等における記述，授業中の発言，教師による行動観察や，生徒による自己評価や相互評価等の状況を教師が放火を行う際に考慮する材料の一つとして用いることなどが考えられる。その際，各教科等の特質に応じて，生徒の発達の段階や一人一人の個性を十分に考慮しながら，「知識・技能」や「思考・判断・表現」の観点の状況を踏まえた上で，評価を行う必要がある。
自分の教科では…			
目標別目標			
何を評価？			
どう評価？			

Ⅲ 成果物

一人一実践学習指導案，新学習指導要領における評価についての分析，Q-U分析，1コミュニティスクールに向けてのグランドデザイン・年間計画等（研究主任 古屋友香）